

フェロモンによるうめ、もものコスカシバの防除

コスカシバは、もも、うめ、あんず、すもも、おうとう等の重要な枝幹害虫である。幼虫が、樹皮下に食入して形成層を広く食害するため樹勢が次第に衰弱し、枯死する場合もある。年1回の発生であるが、幼虫が樹皮下で生活することや、成虫の発生期間が5月上旬から10月下旬までと長いことから、薬剤散布では防除効果が劣り、難防除害虫の一つである。

雌成虫は、交尾の際に雄を誘引するために特有の匂い物質（性フェロモン）を放出する。最近、新しい防除手段として、この性フェロモンを利用した方法が注目されている。すなわち、人工的に合成した性フェロモンを果樹園などに大量に放出して、その匂いが充満す

ると、雄は雌を発見できず交尾ができなくなる。その結果として、産卵が減り、次世代以降の幼虫数を減少させ、被害を徐々に少なくすることができる。この方法を、「性フェロモンを利用した交信攪乱法」と呼んでいる。

試験場では、平成6年度から砥部町のうめ園と松野町のもも園で、この交信攪乱法による大規模な防除試験を行なっている。方法は4月下旬に合成性フェロモンを封入したディスプレイ（写真）を、10a当たり50本の割合で目通りの高さの枝に吊り下げるだけである。1回の設置で成虫の発生期間は有効である。処理1年目の松野町のもも園の結果では、食入幼虫数が前年の7分の1以下に減少しており、高い防除効果が認められている。現在も効果の安定性や設置条件を検討するため、継続して調査を行なっている。

（虫害班：研究員 池内 温）



コスカシバの成虫

ディスプレイの設置状況

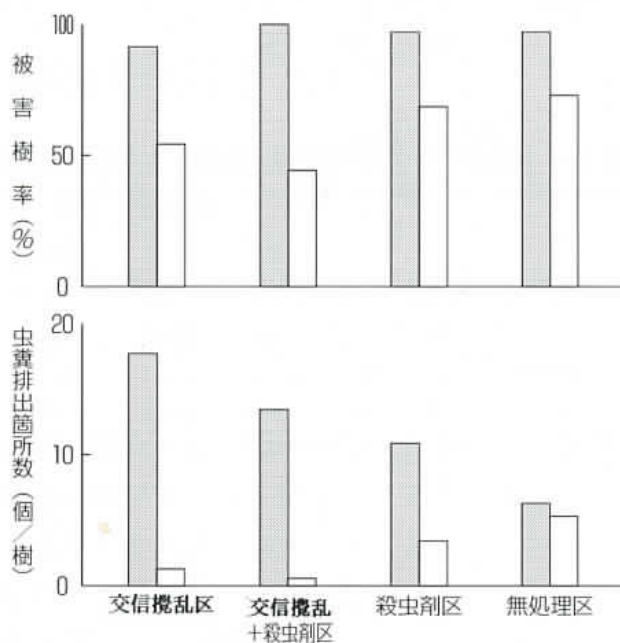


図1 交信攪乱法によるもものコスカシバ防除効果(松野町)

---1994年4月(ディスプレイ設置前)調査
 ---1995年4月(設置1年後)調査